

詩集

日本の
ひまわり

おのひと宝

下間美津江



著 者 略 歴

明治37年 7月 徳島県三好郡三加茂町に西内義教の四女として生まる。

東京女子音体学校卒業、帝国女子専門国文科中退。

大正12年 千葉県人、文部省学校衛生官補下間佐吉と結婚、故人佐吉は生涯教育者として終える。著書、生理解剖・学校体育・年令に適應せる遊戯教育・水泳教授要録等あり。二男一女あり。

歌 歴 昭和14年・久遠の光、昭和35年・吉野川剣山現世、昭和41年・歌集 母のことば、昭和51年・日本のひと花等出版。

母校千葉県吉野小学校に歌碑、母校徳島県三加茂中庄小学校に歌碑あり。

しも つま み つ え
下 間 美 津 江 (旧姓 西 内)

昭和五十二年十一月三日発行

詩 集 日 本 の ひ と 宝 定価 千二百円

著 者 222 横浜市港北区篠原東一丁目四一〇

下 間 美 津 江

電話 〇四五―四三二―八四六二

発 行 236 横浜市金沢区六浦町四四一七

ローズ・マンション 八〇二 鈴木方

ハ マ 短 歌 社

印 刷 231 横浜市中区伊勢佐木町三ノ九五

イセザキ町センタービル

大 生 印 刷 所

電話 〇四五―二五一―〇四七三

序 文

あざやかな高声で、おぎあ と、あいさつして、
此の地上に生れて来た人を日本では人宝として、尊
敬し合つて生活している。人にはそれぞれ生きざま
がある。口ぐせに神さま、仏さまという人が良いの
ではなく、その神の、仏の愛の心で行動している人
が良いかと思う。ことわざに「やどかり虫でも生き
ている」といわれるが、生きるだけなら虫でも生き
ている。人ならばどのようなように生きて行くかと、問
い正される思いがある。人としてえがたい善意をもつ

周辺の人や社会の人のことばも、自分の判断で拒否せずなおに受けとめて人の心の尊厳を養うかとなしたい。人の心の尊さはとうてい知ることは出来ないが、こうありたいと願い、誠実な行動力のある人を見て、埋もれている美しい心の宝が、よそごとながら尊く、又縁もゆかりもなく、まだまだ他人の苦難などわかる筈のないこどもの、誠実な行動力にも日本人として嬉さと希望が湧き上る。こうした人人やかいま見た友人知人交友関係のえがたい心の宝を掘り出して、生きて行く道の伴侶ともなしたい。

今一つ別な願もある。昔の中国の人孔子様は「くさった木には彫刻は出来ない」くさった土はかべ土

にぬれないといわれたが、これは聖人として世の人を指導されるおことばであつて、私共彫刻される身がくさつた木であるまいかと反省する為に、心の宝をもつ人の姿をうつして見た。又相いれぬ心をもつた人の姿も写して、もう一度何の為に人は生きているかとの答を考えたい。

人のおこないで、どんなに小さいことでも、良いことは良いこと。小さい、小さいおこないでも、社会や周囲の人に役立ち喜ばれることにはげむ誠実さが生きているあかしの塔かとも思う。

限界のある生命なれば日本人として心の宝をかはやかし、人の道のがい灯ともなればとの願いであつ

て、此の本は、

宗教的讃歌でもなく、
芸術的讃歌でもなく、
日本人の心の尊さの
讃歌でございます。

不出来でございますが、御恵読頂ければ幸に存じます。

此の本の出版は、鈴木孝一先生の御指導で達成出来ました。厚く先生に感謝いたします。

昭和五十二年十月十日

著 者

目次

第一章 選ばれた人

文 心……………	一三
湧き清水……………	一五
人 宝……………	一七
嬉し さ……………	一九
選ばれた人……………	二一
ないないないは何一つない……………	二三
聖なる人宝……………	二五

第二章 黙 約

花 無 言 三一

花 だ よ り 三七

さ く ら 三九

泡 沫 四五

地位は高官でも 四七

生命の根 四九

大 樹 五二

天声に問われて 五五

天声に答えて 五八

福沢諭吉先生の心訓……………	六一
----------------	----

第三章 自然のめぐみ

夕陽……………	六七
人と人……………	六八
大波小波……………	六九
自然のめぐみ……………	七一
心境……………	七三
プール……………	七四
水泳……………	七五
谷川……………	七七

残しておくもの……………	七八
政治家への期待……………	七九

第四章 豊かなるもの

水……………	八三
用水……………	八六
打ち水……………	八七
薬用の水……………	九〇
沃野……………	九二
本心……………	九四
水先案内……………	九七

第五章 女女女

冬天使……………	一〇三
リズムに合わせて……………	一〇九
ものさし……………	一一七
心の友……………	一二一

第六章 日本人の心

日本の製品……………	一二七
ふるさと……………	一二九
剣山……………	一三三

選
ば
れ
た
人

文 心

へだてなく 照らす太陽

やさしく見守る 神仏の愛

周辺の人人の慈愛に

答えられ

みがかれて 咲きばえた

人の手が

一枚の紙にふれれば

書かれた 文心 絵心 の他に

今ひとつ別な生命が宿つていて

人人は 是げまされ 喜びが湧く

なみ人の 心のとびらが開き

他人の心も みがく人

咲きばえた 人室